
ハピネスッ ～ヲタクな君に、恋してる！～

月千一夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハピネスツ ヽヲタクな君に、恋してる！ヽ

【Nコード】

N6171Y

【作者名】

月千一夜

【あらすじ】

何処にでもある

誰もが見たことのある様な
ありふれた、恋の物語です

ただ、人生で初めての恋をした少年が
ヲタクな彼女と一緒に
ただ毎日を過ごしていく

そんな物語

以前にモバで投稿していたモノを、リメイクした作品です

どうか、お暇な時間にも読んでやってくださいな

第1話 春、それは特別な季節（前書き）

第1話、投稿です

物語の、はじまりはじまり

第1話 春、それは特別な季節

春

出会いと、別れの季節

この頃には入学式があったり、卒業式があったり
お花見とか、特別な楽しみ方もあったりで

皆が皆、きつと何かしら、この季節に対し特別な想いを抱いている
ことなんて

想像には容易い

それはきつと、楽しかったことや

時には、悲しい思い出だつてあるのかもしれない

だけど、まあ・・・そんな特別な季節な春なのだが

非常に残念なことに

真に遺憾ながら

いやまあ、俺はそんな風にすら思っていないのだが

とにかく・・・ぶつちやけて、言つてしまえば

――俺は今まで、そのように“春”に対して、何も特別な感情な
ど抱いたことがなかったのだ

悲しいことも

楽しいことも

皆が言うような、体験したような

そのような、特別なイベントなど、一切なかったのである

それが悲しいとは、思いもしなかったし

少し、“物足りない”と思った程度だった
確かに、俺自身、何かあればいいなあとおもっているのだが
いざ何も起きなかったとしても、“まあ、こんなもんだよな、現実
って”とか

無駄に達観したように、吐き出すだけだった

だからこそ、俺は“期待していなかった”

“春”

今年から、めでたく“高校生”となる俺は
この季節に対して、なんのトキメキも感じていなかったし、一切の
期待はしていなかったのだ

“春”なんて、所詮は四つある季節のうちの一つ

それ以外でも、以下でもない

過ぎ去っていく景色と、なんら変わりはない
気付いたら、終わってる

そんな季節

だから、だからこそ

――俺は、戸惑っていたのだ

もう一度、言おうと思う

大切なことだから

言っておこうと思う

俺は・・・この季節に対して、一切期待なんてしていなかった

だからこれは、誤算は誤算でも

“どう表現したらいいのか、わからない誤算だった”

今まで感じたことのないような

いや、事実感したことのない感覚で、胸がいっぱいになっていくの

だから

戸惑うな、というのが無理な話である

さて、そろそろこれを聞いてくれている人も、我慢の限界だろうと思う

無理もない

朝、或いは夜だろうか

どちらにしても、多分空いた時間を使い、聞いてくれているのだろうし

そろそろ、本題に入ろうと思う

本題、というよりは、俺がいったい何を言いたいのかというと、ことなのだが

まあ、一言でいってしまえば簡単なことなのだ

誰だって、すぐに理解できる

単純明快

そんなお話

それは、ある晴れた昼休みのこと

通っている高校の中庭

其処の名物となっている、大きな大きな一本の木の麓

そこで俺は、一人の“少女”と出会った

「ん・・・」

近づいてきた俺に気付くことなく

眼鏡をかけたまま、未だ眠り続ける少女の髪は、黒く美しい長髪で

鼻のあたりのソバカスも、何ていうか“チャーミング”で

その寝顔は、まるで“天使”のようだったのだ

――さて、ここまで言えば、もう理解できたと思う
春

三度目になるが、俺はこの季節に対し一切の期待をしていなかった
そんな中、俺は出会ってしまったのだ

一人の少女と

美しい天使と

ああ、もう言ってしまったおう

ぶっちゃけてしまおう

でないと、早くなった心臓が、爆発してしまいそうだ

そうだ

この、期待なんてしていない、いつもと同じだと思っていたはずの
季節が

“特別な季節” になってしまったのだ

高校生になって、大体一週間が経過した頃

“春”

俺・・・シノザキカイト“篠崎灰斗”は、これまた人生で初めての、“恋”をして
しまったのだ

ハピネスッ ヲタクな君に、恋してる！

第1話 春、それは特別な季節

――――

私立凌徳高等学校

最近創立されたばかりの、市内では、いや市内どころか県内では最も新しい高校だ

その広大な敷地と、充実したカリキュラムによって、多くの学生が集う有名校にして、“ハイレベルな進学校”だ

その割に入学試験の敷居はそこまで高くもなく、入学後に自身の道筋を決めるといった感じだ

そういえば、意外と言えば髪型のことだろうか

こういう高校などは、大抵の場合は校則などで髪型などが定められているものだが、ここは違った

髪型や髪の色に関しては、一切の自由が認められているのである

意外だと思っし、正直そこはホッとしている

俺は生まれつき茶色い髪だったし、今さら染めるなんて言われても、正直面倒だったから

助かったと、素直に安堵したのも良い思い出である
まあ、たった1週間ほど前のことなのだが

それは、さておき

1週間も経てば、もう新入生たちも徐々に、新しい学校生活に慣れ始めている頃だ

部活に入ったり、新しく出来た友達と一緒に遊んだり
それなりに、学校生活を満喫している頃だろう

――もつとも

それに関しては、“例外”だってもちろんいるわけで

そんな例外に関しては、“俺”だって他人事ではないわけで

「はぁ・・・」

なんて、辛気臭い溜息を一つ吐き出し

俺・・・篠崎灰斗”もまた、この過ぎていく日々^{ヒム}に馴染めずに折角の昼休みを、一人で過^{ヒム}ごしているのである

“何故？”と聞かれれば、恐らくは俺自身の性格にあるのだろうがあまり積極的に他人と話すようなことをするわけでもなければ、率先して委員長などに立候補するような性格でもなく

話しかけられない限り、こっちから話すようなことは、あまりないからだ

もつとも、だからといって、友達^{ヒム}が一人もないわけではないのだ
が・・・

「よゝ、灰斗

どうしたんだよ、そんな溜め息なんかついてさ」

「あゝ・・・別に、なんでもない」

噂をすれば、というやつだろうか

丁度、絶妙なタイミングで話しかけてきたこの男
金色のツンツンした髪型の、いかにも“高校生活エンジョイしてま
す”ってテンションなこの男

名前を、“氷室瑠輝^{ヒムロルキ}”という

瑠輝なんて、随分と洒落た名前だが、案外良い奴で

そこら辺は、腐れ縁というのだろうか・・・幼稚園の頃からの付き合いである俺が、恐らくは一番わかっていいるだろう

性格は天真爛漫というか、とにかく明るく、誰とでもすぐに仲良くなれる

俺からしたら、とても羨ましい性格の男だった

噂では早くもファンクラブなんかも出来ているらしく、コイツが主人公だったほうが良かったんじゃないのかと、本気で思う程に

コイツは、間違いなく“良い奴”だった

だが、残念ながら、この物語の主人公は俺じゃないわけで

申し訳ないが、こんな冴えない俺の物語を、皆様には聞いてもらうしか出来ないのだ

いや、マジでゴメンナサイ

まあ、紹介はもういいだろう

そろそろ話を進めないことには、皆様も退屈してしまうだろうし

「ていうか、いったい何の用だよ？

なんか、用事でもあったのか？」

「冷たいなあ、親友だろ？」

お前がなんか寂しそうにしてたから、親友としては放っておけないじゃんかよ」

「あ、はいはい

どうせ俺には、友達はお前しかいませんよ

しかも、お前と違って女子にモデルわけでもないしな」

と、軽く皮肉って返す俺

瑠輝はというと、そんな俺に対して・・・何故か、“溜め息”

「おいおい・・・前半は、まあスルーするとしてさ後半部分、本気で言ってるのか？」

「なんだよ？」

その通りだろうが」

「あゝ・・・うん、まあいいや

お前は、“いつもそんな感じ” だもんな」

“この、女泣かせめ” と、また溜め息
なんだよ、ソレ

俺の顔を見るだけで、女子は嫌すぎて泣いてしまつてもいいのか？
それは、流石に酷過ぎやしませんかね？

「ま、友達なんて、そう意識して作る様なもんでもないさ
まだ学校生活は始まつて、たったの1週間だろ？
高校生活は、まだまだこれからさ」

「なら、いいんだけどさ・・・」

と、今度は俺が溜め息を吐き出す
それから、俺は席から立ち上がる

「何処に行くんだよ？」

「購買

今日は、弁当作ってくんの忘れたんだよ
そんで折角だから、中庭の景色でも楽しみながら昼休みを過ごすさ」

それだけ言っで、俺は教室から出て
真っ直ぐと、購買へと向かったのだった

――――

「よかった・・・焼きそばパンが残ってて」

等と、安堵の溜め息と共に呟きながら、俺は緑溢れる中庭を歩いて
いた

その片手に、戦利品である焼きそばパンを持ちながらである

この学校は全てにおいてハイレベル、なんてよく言ったものだと思う
俺の持つこの焼きそばパン一つにしても、かなりの美味だというら
しい

その噂は、毎回購買のモノがすぐ売り切れてしまうことが、なによ
り証明しているだろう

かくいう俺も、今から食べるのが楽しみだ

「さっで、あとは・・・食う場所か」

言っで見渡すのは、この学校の自慢であり名所でもある、中庭である
気合の入りまくった、この美しい中庭の中
何処で食べようか、等と考えていたのだ

と、いつてもだ

「もう大体の目処はついてるんだけどな・・・」

言いながら、俺が見つめるのは、この中庭の中で圧倒的な存在感を放つ場所だった

この中庭の、ちょうど中心にあたる場所

其処に見えるのは、大きな・・・というよりも、“巨大な”
圧倒的な存在感を放つ、一本の“大樹”だった

学園名物の一つ・・・“凌徳大樹”

「ホント、勿体ないくらいにそのまんまの名前だよなあ」

こんな、立派な大樹なのにな

どうせなら、“世界樹”とか、そんな名前でも良かったんじゃないのか？

なんて、馬鹿なことを、本気で考えてしまつくらいに

この木は、本当にデカくて、圧倒されてしまうのである

そんな木のが、俺は前から気になっていたわけで

今日、満を持して間近で見ようと思ったわけだ

「焼きそばパン片手につても、なんか気が引けるけど・・・」

まあ、仕方ないか

実は結構、シャイな俺のことだ

情けない話だが、ただ“樹を見たいから”という理由だけでは、俺

はそう気軽には動けないのである
いや、なんか本当に情けないんだけどさ

「ま、昔からだし
今さら、そんなこと思っても無駄だよな」

「――さておき
目的の場所は、もう其処まで迫ってきていた
遠目から見ても相当デカかったけど、近くからみればまた、こつ、
なんていうか迫力があるな
一言でいえば、そう・・・」

「すごく・・・大きいです」

こんな感じだ

うん、まさにこの一言に尽きるな

・・・おい、何だか今、ガチでムチな想像をしなかったか？
言っとくけどこれ、そんな話じゃねーから！

いや、マジで勘弁してくれ

ともかく、せつかく飯を食うって理由をつけて、勇気を振り絞って
ここまで来たんだ

さっさと、目的を果たすでしょう

「ん・・・？」

ふと、徐々に大樹へと近づいていく、俺の視界の中

丁度、大樹の根元あたりだろうか
微かに、人影のようなものが見えたのだ

「あつちやゝ、先客かな？」

と、俺は頭を掻く

よく考えてみれば、いや、よく考えなくったってわかる話だ

此処は、この学校の名所のひとつなのだ

この木の下で昼食を食べようなんてこと、他に考える人だっている
だろう

特に、女子ってこういうところで食べるの好きなイメージがあるよな
いや、あんま話したこととかないし、殆ど想像の中での話なんだけ
どさ

「まあ、いつか」

ひとまず、近づいて様子を見てから考えよう

といつても、まさか“一緒にしてもよろしいでしょうか？”なんて
言う度胸はないんだけどさ

等と考えながら、俺は徐々に大樹へと近づいていく

それと合わせ、視界にうつる大樹もさらにおおきくなり

先ほどの人影も、よりハッキリと見えてくる

――そして、溜め息

「あゝ、よりもよって“女子”かあ」

見えてきたのは、とても長く黒い髪

自分は女子だと主張する、その学校指定のスカート

うん、女子だ

いや、むしろこれで男だったら、とんでもない大問題なんだが
校内で女装とか、ないないない

そう思いながら、俺は近づいていく

そんな中・・・

「・・・え」

何故だろうか

――足が、“止まったのだ”

それは唐突に、突然に、なんの前触れもなく
起こった・・・“異常”

「あ、れ・・・？」

おかしい

明らかに、おかしい

もう、大樹までは、目と鼻の先の距離なのに
いきなり、足が止まってしまったのだ
同時に・・・早くなる、“心臓の鼓動”

「なんだよ・・・コレ？」

自身の身に降りかかった、原因不明の症状に俺は
唯々、その場で戸惑うばかりだった

いや・・・違う

確かに、何が起こったかなんて、俺には全くわからなかった
けど、それでも
こうなったであろう原因に

――俺は、気付いていた

「コイツ」、か・・・？」

ああ、そうだ

俺の足が、動かなくなったのも
心臓の鼓動が、早くなったのも
胸が、わけもわからずに苦しくなったのも
全部、これが原因・・・

「ん・・・」

俺の目の前

この、大樹に寄りかかり眠る・・・この、一人の少女
彼女を見た瞬間から、彼女を認識した瞬間から

俺の中で――何が、“弾けたんだ”

「なんだよ・・・」

呟き、俺は震える手を握り締める

その瞬間、焼きそばパンがとんでもないことになっていたが
そんなの、気にもならないくらいに

俺は、冷静じゃいられなかった

「なんだよ・・・“これ”？」

“これ”とは、この意味不明、理解不能な、この現在の状態のこと
この、どうしようもないくらいに、胸が苦しくなってしまう
そんな、今の俺のこと

「あ・・・」

そんな中、俺はふと思い出す

それは、自分の部屋の中

今まで自分が体験したことがない、いつか体験してみたいと思い集
めていた

何冊もの、本のこと

その本とは・・・“恋愛マンガ”である

「おいおい・・・まさか、これって」

よろめき、額に手をあてる

熱い

熱を出したわけでもないのに、とても熱い

いや、そもそも額に当てた手も、それどころか体全部が・・・とにかく、熱い

ああ、そうだ

俺は、こういう“症状”に、心当たりがあつた

曰くー体が熱くなったりする

曰くー胸が苦しくなったり、鼓動が早くなったりする

それは、俺がまだ体験したことのない

本の中でしか見たことがない

“未知の体験”

その、名前は・・・

「これが・・・恋、なのか？」

“恋”

呟き、俺はもう一度、彼女のことを見つめた

未だ眠ったままの彼女は、安らかな寝顔を浮かべている

美しく黒い髪に、眠ってしまった際にズレタのであろう眼鏡も

鼻の周りに微かに見えるソバカスも

全てが・・・俺を、“ドキドキ”させた

“恋”

篠崎灰斗、十七歳

彼女いない歴、同じく十七年

そんな俺は、ある日出会ってしまったのだ
学園名物である大樹

其処で眠る

一人の・・・“天使”と

その日・・・俺にとって、初めて春という季節が、特別なものへと
変わったのだった

く続く

第1話 春、それは特別な季節（後書き）

さて、いかがだったでしょうか？

うん、このお話だけじゃ、何が何だかわからないよねw

次回は、なるだけ早く投稿します

それでは、またお会いしましょう

第2話　まずは、声をかけるところから（前書き）

どうも、月千一夜です

第二話、公開します

今回もまた、彼女はあんまり出てきません
悶々とする、勇気を振り絞る
そんな少年の、お話です

第2話 まず、声をかけるところから

「ソイツは多分・・・“瀬川アズハ”のことじゃないかなあ」

――“瀬川アズハ”

浅瀬の“瀬”に、三の字の方の“川”

名前の“アズハ”はカタカナで書くらしい

身長は150センチ弱

長い黒髪に、赤淵の眼鏡

性格は、一言でいえば“暗い”

というのも入学して一週間が経つ現在、彼女はまだ友達がいらないらしい

俺と違い、幼馴染などもないみたいだ

故に、彼女はいつもクラスでは一人なのだ

因みに彼女のクラスは“一年三組”

俺が二組なので、教室はすぐ隣ということになる

それを知った瞬間、心の中でグツとガッツポーズしたのは

まあ、内緒にしておこう

さて、そんな彼女

瀬川アズハについて

何故彼女のことを、俺の友人にして親友が、こんなに知っているのか？

それは、彼女を語るうえで欠かせない、“ある事情”に起因するらしいのだが

それ故に、彼女には未だ友人と呼べる人がいないらしいのだが

それについて、アイツは教えてはくれなかった
なんでも、“人から聞くよりも、自分で直接話かけ、知ったほうが
いいだろう？”とのこと

無茶を言うものである

そう易々と、人に話しかけられるものならば、もうとっくにお前以
外の友人だって出来ている

そのうえ、まさかいきなり初恋の女子に声をかけると言うのだ
死ねる

ハズか死ねる（え？）

しかし

しかし、である

俺だって、“男”なんだ

こういう時に勇気を出さないで、何時出すっていうんだよ

そうだよ

そもそも、唯話しかけるだけじゃないか

こつ、もつと気楽にこつ

“おはよう”とか、“はじめまして”とか

そういう、当たり障りのない会話から始めればいいじゃないか

などと、考えながら

俺が、彼女と出会った翌日のこと

時間と言えば、昼休み

俺は、彼女のクラス、もつと言ってしまえば、彼女の机のすぐ前に
立っていた

集まる、そのクラス中の視線

無論、彼女も“何事ですか？”と、驚いたような表情を浮かべ、此
方を見ている

そんな彼女の視線に、本気でドキドキしながら

俺は、授業時間さえも潰して、考え続けていた一言

“瀬川さん・・・ちょっと、いいかな？”

――という、テンプレ的、かつ当たり障りのない言葉を発すべく
スタンバッテいた

俺は、いよいよ

彼女との、初の“対話”を試みるのだ
というか

その、はずだったのだが・・・

「おいアンタ、瀬川だっけか・・・ちょっと、ツラ貸せよ」

「ひっ・・・!？」

・・・いくらなんでも、これは違う気がするんだ

瀬川、泣きそうじゃんか

ていうか、泣いてるじゃんか

けど、ごめん瀬川

――泣き顔も、滅茶苦茶可愛いです（^ ^）

ハピネスッ　　フタクな君に、恋してる！
第2話　まずは、声をかけるところから

――――

さて、そもそものお話

何故、先ほどのような状況になってしまったのか
まずは、その辺りのことから話さなければならぬだろう

それは、俺が彼女と

その頃はまだ名前を知らない“天使”と出会ってから、一日たった
翌日

朝のHRの、少し前のことだった

「俺・・・恋を、してみたいなんだ」

「・・・は？」

朝一番、教室の中での、俺の一言
それに対し瑠輝はというと、口をポツカリとあけたまま信じられないといった表情を浮かべていた
そんな友人にして親友であるコイツの態度もよそに、俺は机に頬をつけたまま思い出す
昨日の昼休みに出会った、あの美しい天使のことを

「い、いやいやいや
朝一でいきなり、ナニぶっ飛んだこと言っただよ灰斗
おまつ、おちおち落ち着けて」

「いや、お前が落ち着けよ」

なんだよ、いきなり
普段のコイツらしくない
いつもはもっと、飄々としているのに

「いや、つーか落ち着けて方が無理だろ！？
あの、お前が恋いいいい！！？」

「ばっ、声がデカいんだよ、声が！！」

慌てて瑠輝を止めるも、時すでに遅し
クラスの視線が、もう凄まじい勢いで集まっていた
小さく“え、篠崎君って好きな人いたの？”とか“嘘・・・”など、
何故か妙にガツカリしたような、そんな声が聞こえてくる
そんな視線に必死に耐えながら、俺は瑠輝に顔を近づける

「頼むから、静かにしてくれ
オーケー？」

「オーケーわかった
わかったから、その眉間にグリグリと捻じ込んでる手を離してくれ
かなり、痛いんだ」

言われ、俺は手を離す
すると瑠輝は、安堵したように溜め息を吐き出す
それから、俺のことを見つめたまま苦笑を浮かべるのだった

「しかし、マジか？
お前が、恋って・・・」

「悪いけど、マジだよ」

「っははは・・・そっか
それはまあ、なんていうか
幼馴染としては、素直に嬉しくはあるな」

笑い、瑠輝は再び顔を近づけてくる
それから、“そんで”と小さく呟いた

「いったい、誰が好きなんだよ？」

「いや、それが・・・名前、聞けなかったんだよな」

俺はそう言つと、深く溜め息を吐き出した
というのも昨日

彼女を見つけた後のことなのだが

その寝顔が、あまりに綺麗で、あまりに輝いて見えて

俺は、彼女を起こすこともなく

其の場から、思い切り駆け出してしまったのだ

無論、彼女は眠ったままなのだから、俺のことだって知らないだろう

俺もまた、彼女のことは一切わからないまま

あの日の出会いは、終わってしまったのである

「なるほどねえ・・・」

“まあ、灰斗だしな”と、瑠輝

おい、それはどういう意味だコラ

「そうだな・・・どんな子だったのか、見た目とか、外見とか、覚えてるか？」

「ああ、それなら・・・」

覚えている

というよりも、“忘れるはずがない”

あの、黒く長い美しい髪も

あの、赤淵の眼鏡も

鼻のまわり、微かに見えたソバカスも

全部、俺の脳みそに、確実に焼き付いてる

心の中、メモリーカードにセーブ済みだ

そんなわけで、最初の説明、冒頭のお話に戻るわけだ
俺が彼女の特徴を話した瞬間に、驚くほどあっさりと判明してしま
ったのである

“何が？”と聞かれれば、勿論“彼女”のことだ

彼女――“瀬川アズハ”について

どうやら、瑠輝は彼女のことを知っていたらしい
もつとも、自分から話したことはないらしいが
それでも彼が知っているくらいに、彼女は有名ということだろうか？

「瀬川、アズハ・・・か」

「変わった名前だろ？
アズハって、カタカナで書くんだけ？」

「いや・・・綺麗な名前だ」

「・・・マジで、ホレてるみたいだな」

言って、瑠輝は溜め息
それから懷から、一冊のメモ帳を取り出し、パラパラとページをめ
くり始めた

「なんだよ、ソレ？」

「なにつて、そんなの決まってるだろうが
俺が幼稚園の頃からつけてる、“灰斗の成長日記”だよ」

「なにそれ、初耳なんだけどっ!？」

「言っていないもん

えつと・・・“今日、灰斗に好きな女が出来た。明日できっと、世界は終わってしまうのだろう” っ」と

“コレで、よし”と、瑠輝は笑顔を浮かべたままメモ帳をしまっ
いやいやいや、何が“よし”だよ

全然よくねーんだよ

なんだよ、その日記

なんで、お前が俺の成長を記録してんだよ
そんで、すげえ失礼だな、オイ

「ま、細かいことはいいとして・・・だ」

「おい、コラ

流そうとすんな」

「いや、マジで今は置いておいてだ
今重要なのは、これからどうするか・・・だろ？」

「むう・・・」

確かに

悔しいが、瑠輝の言うとおりである

昨日のヘタレっぷりを聞けば、わかるとは思っ
好きになって、それからどうしたらいいのか

俺には、全くわからないのである

「どうしようっ?」

「どうしようって・・・ひとまず、話しかけるところからじゃないか?」

“普通は、そうだと思うが”と、瑠輝

“話しかける”か

言葉で言えば簡単だが、実際に実行するのは難しいだろうなあっていうか昨日、眠った彼女を前にして、あのザマである起きている彼女相手に、話しかけられる気がしないのだが・・・

「けど・・・そうも、言ってもらえないよな」

「おいおい、珍しく積極的だな」

「あゝ、うん」

“まあ”と、苦笑い

確かに、俺には瑠輝以外に友達はいなかったけど

確かに、俺はあんまり自分から他人に声をかけることはなかったけどそれでも、そんなことを忘れてしまいうくらいに

俺は・・・彼女の声を、聞いてみたかったんだ

――――

「それで、どうしてこうなったんだよ」

時間は過ぎて、昼休み

そんな風にボヤキながら見つめるのは、目の前の教室の表札
扉の上には、“一年三組”と書かれていた

先ほども言ったが、此処が瀬川のクラスである

その教室の扉の前に、俺は腕を組み立っていたのである

その隣には、瑠輝がニヤニヤとしたまま立っていた

「いやいやいや、いきなりすぎるだろ」

「そんなことはないだろ」

よく言うじゃないか、“兵は神速を尊ぶ”って

ともかく、なるだけ早いうちから彼女と接点を持っておきたいだろ
？」

「それは・・・まあ」

確かに、そうなんだけど

まさか今日、しかも昼休みに、彼女との初の“対話”を試みるこ
とになるうとは

その後

朝の会話のすぐ後、瑠輝は“俺に任せろ”と言ったのだ

それからすぐ、アイツは“ひとまず、話しかけるところからだな”
と計画を練り始める

休み時間では、時間が無さすぎる

ならば、昼休みだーと、今に至るわけである

因みに・・・

「えっと・・・始めまして、瀬川さん”からの、”この後、一緒にお話でもしない？”
これで、いいのか？」

「いいんじゃないか？」

あんまり、こう・・・怖い顔をしないで、な」

「言つとくけど・・・目つきが悪いのは、生まれつきだぞ？」

「知ってるよ

けど、なるべく笑顔でな」

「できたらな」

言つて、溜め息を吐き出す

前回・・・メタなことを言ってしまったえば、第一話の時点ではまだ言っていないかったのだが

どうやら、俺の目つきは相当悪いらしい

というか、俺自身もウンザリするほど自覚している

おかげで怒っているわけでもないのに、怒っているものと勘違いされる始末

小学校の頃ならばともかく、中学になって背が伸びてからは、ます

ます鋭くなってしまった
多分、というか確実に

俺に友達が出来ない原因に、コレも多分に含まれるのだろう

「はぁ・・・」

なんて、何とも嫌なことを思い出しながら
俺は、三組の教室の扉に手をかける
それから・・・

「そんじゃ、勇氣出して行ってくるわ」

「ああ

俺はこっから、見守ってるからよ
なんか困ったら、こっちを見てくれ
助け船を出してやるから」

“あんがと”と、瑠輝に笑い掛けながら
俺は――その扉を、勢いよく開いたのだった

瞬間、集まってくる幾つもの・・・視線

“篠崎君が、このクラスに来たよ”や、“嘘・・・超嬉しいんだけど”など、良く聴こえはしないが
ひそひそと、響く声

思わず“うつ”と声をあげ、教室から出ていきたくなる衝動にかられる

が、なんとか堪える

そのまま、見回した教室の中

“彼女”は、いたのだ

場所と言えば、窓側の一番後ろ・・・教室の一番奥、一番隅っこそこに、彼女はいたのだ
他の生徒同様に、驚いたような表情を浮かべ、俺のを見つめながら

や、ヤバい・・・滅茶苦茶、可愛いじゃねーか、畜生

「って、そんな場合じゃないだろう俺」

と、小さく呟き、深呼吸

それから、ゆつくりと歩き出す

やがて・・・俺は、彼女の机のすぐ前に立っていた

「え・・・？」

と、小さく声をあげたのは瀬川である

そんな彼女を前にして、俺はもう緊張のあまり、手汗がヤバかったどれくらいかっというところ、 “ ロックマンXのボス戦の時、壁蹴りを多用しながら長時間戦った時くらい ” に、手汗がヤバいのである
または、“ PCで小説を書いている時、夢中になりすぎて気づいたら手汗がヤバかった時 ” である

・・・いや、けっして作者のことではないので、あしからず

ともあれ、だ

このままでは、状況は一向に進まない

昼休みだつて、限りはあるのだ
そもそも、まだお昼だつて食べていない
急がなければ、お昼を食べる時間がなくなってしまふ

「よし・・・」

よし、覚悟を決めよう

そうだよ

もつと、楽に考えればいいじゃないか

別に今日、彼女に告白をするわけではないのだ
ただ、“会話”をするだけ

当たり障りのない、そんな会話をするだけだ

そう考えれば、少し冷静になつてきたぞ

この勢いで、言えばいいんだ

なるべく、笑顔を浮かべながら

彼女に、言えばいいんだよ

“はじめまして”つて、そう言えばいいんだ

――よし、言え・・・俺！

「おいアンタ、瀬川だっけか・・・ちよつと、ツラ貸せよ」

「ひっ・・・!?!」

その瞬間、教室が大きくざわめいた、言えた・・・無事に、彼女に話しかけることがd（ry

（^ ^）アレ？

ーって、おい！
どうしてそうなった、俺！！！！

“はじめまして”が、どうなったら、そんな言葉に変換されるんだよ！！！！

「あ、あの・・・そのっ・・・」

しかも、瀬川泣きそうじゃねーか
いや、もうモロに泣いてるじゃねーか
けど瀬川、ごめん・・・泣き顔、滅茶苦茶可愛いっす

「・・・って、そうじゃねーだろ！」

「っ！？」

頭を抱え、思わず声をあげてしまう
瞬間、ビクリと体を震わせる瀬川
ああ、違うんだ
そんなつもりじゃなかったんだよ
ヤバイよこれ、マジでやばい

話した言葉もだけど、きつと中途半端に浮かべた笑顔も、きつと彼女が怯えてる原因の一つだと思う

死にたい

激しく死にたい

「っ、そうだ!」

その時、俺は思い出す

こんな時の為に、出入り口には瑠輝が控えてるんじゃないか
早速、何かアドバイスを・・・

「って、いねーし!」

いなかった

瑠輝は、そこにはいなかったのである

ジーザス、アイツ逃げやがった

ていうか、ちよつと待て

これ、どーすんだよ!?

この状況、いったいどうすればいいんだよ!?

「あー、くそ!

瀬川、ちよつと来い!」

「っ、キャッ!」

咄嗟のことである

というより、こんな状況の中にいるくらいなら、なんてそんなことを、思っていたのかもしれない

俺は無意識のうちに、“彼女の手をとって、其の場から早足で歩き始めていたのである”

そしてそのまま、教室から飛び出していたのだ

話しかけるのに、失敗したくせに

彼女の手を無意識のうちとはいえ、こうして握れたことに
これまた無意識のうちに、喜んでいる俺が

――― 此处には、いたのである

く 続く

第2話 まずは、声をかけるところから（後書き）

いかがだったでしょうか？

灰斗くん、暴走中w

次回は、ようやく彼女が色々話すことになります
そして、彼は・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6171y/>

ハピネスッ ～ヲタクな君に、恋してる！～

2011年11月19日20時30分発行